

(85)

氏名(生年月日)	古 味 隆 子
本 籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第1163号
学位授与の日付	平成3年3月15日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	糖尿病性起立性低血圧症に関する臨床的研究 —起立時の血圧下降パターンと自律神経機能および尿中カテコラミンとの 関連について—
論文審査委員	(主査) 教授 平田 幸正 (副査) 教授 細田 瑛一, 白坂 龍雄

論文内容の要旨

目的

糖尿病における起立性低血圧症(diabetic orthostatic hypotension (DOH))の原因として、自律神経障害の関与が考えられている。通常、DOHは起立直後の血圧の低下だけで診断されているが、起立直後に低下した血圧が起立2分後に上昇する型とさらに低下する型とがあることに注目し、これが自律神経機能の障害の程度に関係するかどうかを検討した。

対象および方法

対象は、1984年より1986年までの間に東京女子医科大学糖尿病センターに入院した20～69歳のインスリン非依存型糖尿病患者のうち、脳血管障害、心・肝・腎不全を有する者と降圧利尿剤・抗うつ剤の使用例とを除いた者のうち、DOHすなわち収縮期血圧が起立直後に安静仰臥位に比べて20mmHg以上下降する56例(OH(+))群と、これと年齢・性をマッチさせたDOHを有さない糖尿病28例(OH(-))群である。OH(+))群はさらに、起立2分後に収縮期血圧が再び10mmHg以上上昇する群(OH(+))再上昇群)32例と、10mmHg未満の上昇にとどまるかもしくは低下する群(OH(+))持続低下群)24例とに分類した。以上の合計84例に、深呼吸負荷ならびに起立負荷による心電図RR間隔変動測定、24時間尿中カテコラミン排泄量測定を行った。なお、上記の血圧は自動血圧計にて連続的に測定を行ったものである。

結果ならびに考察

OH(+))群はOH(-))群に比べて、糖尿病の罹患年数が長く($p < 0.05$)、糖尿病性網膜症および腎症が進展しており($p < 0.001$)、また深呼吸負荷による心電図RR間隔変動が小さかった($p < 0.001$)。さらにOH(+))持続低下群はOH(-))群およびOH(+))再上昇群に比べて、24時間尿中ノルエピネフリン排泄量が低かった($p < 0.025$)。OH(+))群はOH(-))群より糖尿病病態および副交感神経障害の程度が強く、さらにOH(+))持続低下群は、OH(-))群およびOH(+))再上昇群より交感神経障害が高度であると考えられ、OH(-))群、OH(+))再上昇群、OH(+))持続低下群の順に進展することが推測された。

結論

糖尿病性起立性低血圧症を、起立2分後の血圧パターンにより2群に分類することは、重症度を表すのに有用であった。

論文審査の要旨

本研究は、糖尿病患者に頻発する重症の起立性低血圧症に関して、自動血圧計、各種の自律神経機能検査法、および尿中カテコラミン測定などを施行し、その発現機序を解明したものであり、臨床、学術上、価値ある論文である。

主論文公表誌

糖尿病性起立性低血圧症に関する臨床的研究—起立時の血圧下降パターンと自律神経機能および尿中カテコラミンとの関連について—

東京女子医科大学雑誌 第61巻 第1号

64-69頁（平成3年1月25日発行）

副論文公表誌

- 1) 慢性進行性の小脳症状を呈したクリプトコッカス髄膜脳炎の1例

日内会誌 78 (5) : 672-673, 1989

- 2) 糖尿病性インポテンスの心理的背景

IMPOTENCE 4 (1・2) : 1-7, 1989

- 3) TS-701 (塩酸ミドドリン) の糖尿病性起立性低血圧に対する有用性の検討

基礎と臨床 21 (2) : 191-204, 1987

- 4) 体表の温度点、特に冷点に関する二、三の知見

東女医大誌 50 (4) : 357-363, 1980